

---

# キャプテン・オリマー冒険記

怜lay

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キャプテン・オリマー冒険記

### 【Zコード】

Z4536A

### 【作者名】

怜 1 a y

### 【あらすじ】

任天堂ゲームキューブソフト「ピクミン」を元ネタに使用し、大胆に擬人化に挑んでみました。ゲームをプレイしたことがある人は、大体の流れはつかめると思います。しかしゲームと違うのは、それのキャラに感情とセリフがあるところ、でどうか。実際のピクミンがこんな感じだったら、きっと買つ人は多くなるんでしょう

ね

## 序章 摩訶と出合い（前書き）

宇宙規模の運搬業を営む「ホコタテ運送」に勤務するエース・パイロット、キャプテン・オリマー。でも、今は長期休暇中。のんびり宇宙を散歩していました・・・

## 序章 摩落と出会い

### （序章）

「うへへ・・・んっ！」

大きく伸びをするオリマー。

「今日は何処に行こうかな～」

レーダーで現在地を確認して周辺に惑星がないか探索する。

「おっ！？なんだ・・・？」

レーダーに小さな反応。それももの凄い速さで「すか！」に向かっている。

「！」、これは・・・ヤバいつ！

急いで緊急退避に取り掛かる。

間一髪、ギリギリのところを宇宙船ほどの大きさのつぶてが通り過ぎる。

「あ、あぶね～・・・」

その時

ドオオオオンツ！！

「うわっ！？」

大きな衝撃。

後ろに控えていたとてつもなく大きな隕石が衝突。

「くそっ、ハンドルが動かねえっ！」

どうにか受け流そうとするも、ハンドルが動かない。

『デンジャー！ デンジャー！』

宇宙船から危険信号が発せられる。

「わかつてるっ！」

このままでは宇宙船が持たない。

横つ腹に当たった隕石はメインエンジンスレスレで止まっている。

「エンジン全開っ！ 無理にでも突破するんだっ！！」

『イエッサー。エンジン全開！』  
メインコンピュータが復唱する。

さらに大きな衝撃。

タコメーターが大きく振り切る。  
ガリガリガリッ！！！

隕石と宇宙船が擦れる音。

「くそつ、このままじゃ・・・」

『メインエンジン、停止！』

「！なんだつてつ！？」

唯一のメインエンジンが止まってしまった。

突然の加速でオーバーヒートしてしまったようだ。

瞬間、大きな衝撃が宇宙船を襲う。

「うわあつ！」

宇宙船が軌道を逸れ、小さな星の重力に引っ張られる。

「くそつ！サブエンジン、点火だつ！」

『サブエンジン、点火！』

衝撃を和らげる為にサブエンジンを点火する。

点火までには多少時間がかかる。

その間にも宇宙船は徐々にスピードを上げる。

『メーデー！メーデー！』ダイナモより発火！』

内部の燃料から火の手が上がる。

と、同時に引力との摩擦力で宇宙船外部からも火が上がる。

「こ、これじゃエンジンに火が点く前に燃え尽きる・・・」

だんだん大地が目前に迫ってきた。

緑の多い星だつた。

『メーデー！メーデー！メ・・・・・・・・ザザーッ』

「おい、どうしたんだよつ！？」

メインコンピュータが何も応えなくなつてしまつた。  
外を見ると、火の玉となつた宇宙船のバーツがどんどん落ちていく  
のが見える。

「なつ！？」

直後、とてつもない衝撃がオリマーを襲つ。

「うわああっ！」

・・・・・

遭難の日田 → 遭難地点

「いててて・・・

なんとか宇宙船から這い出してきたオリマー。振り返ると

「あっちや～・・・やっちやつたな～」

ヒックリ返つたボロボロの宇宙船があつた。メインエンジンまでもを失つて、宇宙船としての機能は全く持つないといふことだ。

「ん～・・・どうしようかな～」

とにかくジタバタしても始まらない。その辺になにか無いか探すべきだ。

「どれどれ・・・ん～？」

グルツと見回す。

不思議な花が何本かと、丸い大きな何がある。

草花の多いこの星だ、原生的な生物も多数残つているのだろう。おそらく、人間らしき生物はいないと考えてい。

「となると、早めに出ないと危険だな～・・・」

宇宙服が外せないために、こめかみを搔こうにも搔けない。テクテクとその辺を歩いていると、

「あなた・・・誰？」

「ー誰だつー？」

声のした木々を見上げる。

「お、驚かせてごめんなさい。あたし、ゴーシイっていうの、一本の木から下りてきた赤い服のような物をきた同じ背丈くらいの女の子。

「そうか、この星の人だね」

「ええ、そう。あなたは誰？」

先程の質問を繰り返す。

「オレはキャプテン・オリマー。あの宇宙船に乗つてたんだけど、隕石とぶつかつてね」

「そうなの・・・大変だね、オリマーも「らしきもの」

とにかく人に会えたのは心強い。

「この星のことを詳しく聞かせてくれるかい？」

「ええ、いいわ」

ゴーシイはテツテツテと歩いていくと、さつき見た花を指して、「あれはペレット草つていうの。あの真ん中にあるペレットつていう私たちの栄養分になる実を付けるのよ」

「私、たち・・・？」

この星にはゴーシイのような生物がまだいるのだろうか。

「うん。この星には私の他にも大きな生き物がいっぱいいるんだ。皆凶暴だから気をつけたほうがいいよ」

「そ、そう・・・」

何気ないことをスラッといつ。思いのほか恐ろしいことを。

「私はこの星では一番弱い存在なの。」「フェアリー」って呼ばれたこともあつたケド

「フェアリーか・・・」

たしかに妖精のような容姿を持っているともいえない。

「この星の生物たちは夜になると凶暴性を増すの。だから私たちは、夜は空に上つて安全を確保するんだ」

「空、つて・・・どうやって?」

「あれだよ」

さつき降りた来た木の上を指す。

木の上には、玉葱に良く似た形の赤い飛行船が停滞していた。  
「あれは”オニオン”っていうの。私はあの中で生まれたの」

「ふうん・・・」

オニオンはフェアリーの母体つてことか。

他にもオニオンがあればそれに属するフェアリーがいることになる。

「他にも、あのオニオンはあるのかい？」

「ううん・・・詳しく述べ知らないけどいくつかあるみたい。空に上がったときによくつか見たことがあるの」

「そつか・・・」

彼女だけではちょっと心細いところがある。

もつと仲間が欲しいな。

「そういえば、君は一人なの？」

「うん、そうだよ」

「ふうん、つて何してんの？」

「ふえ？」

軽々と大きな岩を持ち上げるユーシイ。

思わず唖然としてしまう。

「うん、時々こうしないと力が落ちちゃうからわ」

「ち、力持ちなんだ・・・」

「うんつ

なんだかうれしそうだ。

「あ、じゃあさ、ちょっとお願ひがあるんだけど」

「ん? なにかな?」

「あの宇宙船、ボロボロでさ、動かないんだ。元に戻すのにはあと30個ぐらいパーシグが必要なんだけど、

「オレ一人ではどうにもならないから・・・」

「ふんふん、つまり。そのぱーつていうのを集めればいいのね」

「そなんだ。手伝ってくれるかな?」

「モッチロン。手を貸してあげるよ」

胸を張るゴーシャ。『うこうとうじゆせんじゅうじかわいとゆ』。

「そつか、助かるよ。ありがと」

「んつん~ いこつてことよ。何かの縁つてことで、ね」

右手を差し出す。

「あ、そつか。よひしへ頼むよ」

握手かと思つて右手を差し出すが、どうやら違つみたいだ。

キヨトンとしてくる。

「ん? 何か違うのか?」

「これはあ~・・・」

サムアップの形で、四本の指を絡め合ひ、親指を合わせる。

「ふうん、この星では握手はこひやるのか・・・」

「そうこひこと。オコマーの星ではざひやるの~」

「ああ、オレの星では・・・」

普通に右手を差し出す。ゴーシャも真似をする。

ゴーシャの手を握る。

「よひしへ ゴーシャ」

「うん~」

どうやら心が通じ合ひつてこひのせひこひとひつて。

「で、早速なんだけど」

「うん?」

「あの宇宙船、メインエンジンが無いから動かすこともできなーん

だ

「へえ、やうなの」

メインエンジンがないと何も出来ない。

まずはメインエンジンを探さないと。

「近くに落ちてる」と願つてゐよ

「やうだね~・・・あ、ちよつと待つて」

そつこつて一番高いと思われる木に登つていぐ。

「あ~、やっぱり一アツチに変な物落ちてるよ~」

指差したまうを見ると、岩山があつて向ひに行けばそつこ無い。

とりあえず、近づいてみると、岩山に挟まるるようにダンボール、  
だろうか。が置いてあつた。

「これは・・・」

「ふうん、これはちょっと重そうだけど・・・」  
箱に手をかけてグッと力を入れる。

「うへん・・・つ！」

本気で押してもビクともしない。

「はあ、ダメだこりゃ」

箱に寄りかかって座る。

コースィは箱を観察している。

手を当てて、

「・・・よつ！」

思いつきりなのか、衝掌を繰り出す。

その一撃で、箱は大きく動く。

「うわわわっ！」

後ろに転がつてしまつた。

「ふふ～ん」

「すつづ～・・・」

箱の向こうには台地があつた。

台地へ向かう上り坂の袂にそれはあつた。

「おお～！これはっ！」

これぞまさしくメインエンジン！神様はオレを見捨てなかつた～！

「さて、あとはこれを運ぶだけなんだけど・・・」

「どれどれ・・・」

コースィはメインエンジンを持ち上げようとする。

「うへん・・・一人じゃちょっと厳しいかな。オヤマー、手伝つて  
「オッケー」

コースィとは反対側に立つてメインエンジンを持ち上げる。

「よいしょ、つと」

一人で、宇宙船の前まで持つていく。

宇宙船には物体転送装置がついているから、ボタン一つでセット可能だ。

「え～っと、たしかこのへんに・・・あ、あつたあつた」

ボタンを押すと、メインエンジンは吸い込まれるように宇宙船の元あつた場所に戻つた。

それと同時に、宇宙船の向きも元に戻る。

「よし、これで飛び立つことは可能になつたかな」「よかつたね」

ひとまず安心、といつていいか。

「でもまだ宇宙に出るのは無理かな～・・・」

まだまだパーザーが欠落している。

宇宙に出るには燃料も足りないし、火力も足らない。

「とにかく、今日は休もう」

「あ、待つて」

宇宙船に入ろうとして、ゴーシィに呼び止められる。

「ちょっとお願ひがあるんだけど」

「なに?」

「あの・・・お腹空いちゃって・・・」

「ああ、そうだね」

えつと、確かペレットが栄養分だつて言つてたよな。

「あれでいい?」

赤いペレット草を指す。

「うん」

「よ～し」

ペレット草の根元に近づく。

この星の生き物はみんな凶暴らしいけど、植物は温厚なのかな。つてこない。

「はあ～～・・・つー」

拳を腰溜めにして気合を入れる。

「せいつー！」

ペレット草に向けて聖拳を放つ。

ペレット草は実を残して地中に戻っていく。

「おお～！」

ユーシイが歓声を上げる。

「ほらっ」

ユーシイに手渡す。

「ありがとっ」

ユーシイはペレットを大事そうに抱えてオニオンへと戻っていく。

「？食べるんじゃないのか？」

「食べないよお～。つていうか、食べれないよ、硬くて」

ペレットをオニオンの下に掲げると、さつきパーティを戻した時みたいに吸い込まれていく。

「ペレットは、こうやつてオニオンに一度預けて、”大地のエキス”に戻してもらわないと食べれないの」

オニオンの頭の部分から黄金色のゼリー状の物質が出てきた。

「ふうん・・・」

放物線を描いてこちらに降つてくるエキス。

「あ、オリマー危ない！」

「え・・？」

次の瞬間、目の前が黄金色に染まる。

どうやらエキスの中に入つてしまつたようだ。

「ふはっ！」

どうにか、エキスから這い出す。

「大丈夫？」

「な、なんとか」

「よかつた。どうなることかと思つたよ」

ユーシイは安心すると、大地のエキスへと向かう。

「それ、どうやって食べるの？」

「これ？吸うんだよ」

吸うのか。

「ふうん・・・」

ちゅうちゅうちゅうの音を立てながら吸い上げるコーラシイ。

どうやつたらその小さい体に収まるのか、全部吸いきってしまった。

「ふう、お腹いっぱい」

コーラシイの頭に付いている葉っぱが花へと変わる。

最初は飾りだと思ってたけど、フェアリーも植物、なのかな。  
大地のエキスはこの星の植物の栄養源のようだ。

「さて、と。今田はもう休もつか。そろそろ日が暮れるよ」

「ん、そうだな。夜は危険だ、つてさつき言つてたし」

ここいら辺には原生生物がいる気配はないが、夜になるとここまで来るかもしれない。

油断は禁物だ。

「この星の一日は早いんだな」

「そう? 私には普通だけどな」

「そりや、この星にずっと住んでいれば慣れるだらうね」

この星の一日はホコタテ星でいうと約18時間だ。

ホコタテ星では20時間で一日が終わる。あまり変化はないな。

「これならすぐ慣れるかな」

「そうだね、すぐ慣れるよ」

「あ、そうだ。コーラシイ、これ」

「ん?」

ポケットから小型通信機を渡す。

「何かあつたらこれに話しかけてくれ。オレが応える」

「ふうん・・・わかった。ありがと」

なんだかよく分かつてないみたいだったが、とりあえずポケットにしまう。

「それじゃ、また明日」

「うん、おやすみ」

それぞれの船へと帰つて行く。

今日の出来事を日記に書いておこう。

「今日の発見、と・・・」

この星にはユーシィのようにフュアリーと呼ばれる生物、というか植物に近いようだが、のほかにもいろいろな生物がいるみたいだ。それらが皆、ユーシィのように心優しいとは限らない。油断は禁物だ。

この星の植物たちは大地のエキスを養分としているらしい。ユーシィは赤いペレットから取れるエキスが大好物のようだ。

ひとまず、宇宙船で空に飛び立てるようになった。

空から見下ろす大地には、青々とした森が茂っている。

オレはここいら一帯の森を”希望の森”と名づけた。明日からは、この森を探索することにする。

未だ、宇宙船には29個ものパーツが不足している。早く見つけ出して帰らないと、命の危険がある。

それに、ユーシィだけではできないこともこれからあるはずだ。まだまだ仲間が欲しい。

（END）

## 序章 摩落と出でで（後書き）

なんとか生き延びれそうなオリマー。コーチィといつ心強い仲間も出来て、ちょっと安心ですね。次回は黄色い子が登場する予定。一騒動ありそうな予感です。

## 第一章 新たなる出会い（前書き）

さあ、いよいよ本格的に探索開始です。果たしてどんなものがオーマーを待ち構えているのでしょうか・・・

## 第一章 新たなる出会い

遭難（「田田（希望の森）」）

「ふう・・・」

希望の森へ無事到着。

この森には原生生物が多数いるようだ。  
コースイだけではやはり心細い。新たな仲間がほしいところだ。

「おはよ、オリマー」

「おはよう、コースイ」

コースイのオニオーンは、オレの船について来たのか、すぐ近くに停まっている。

「さて、と・・・」

着地地点周辺を見回す。

岩山に囲まれているから、脱出口を作らなきゃダメだ。

「コースイ、どこが壊せるような壁はあるかい？」

どこを見ても、同じように見えるから、この星に住んでいたコースイに聞くのが早い。

「もうだね・・・。あ、ここなら壊せそうだよ~」

そこは、白っぽい土でできた壁だった。

「たしかに柔らかそうだね」

グーで軽く殴つてみると、パラバラと土が舞う。

「よし、ここを壊そ~」

「うん。で、どうやつて?」

「・・・う~ん」

正直、どうすれば良いのが分からぬ。

「・・・殴つたり、とか」

「え~・・・でも、他に方法ないよねえ~」

苦笑ながらも、軽くペシペシと殴つている。

その度にちょっとづつヒビが入っていく。

「・・・・・」

だんだん壁殴りにハマり始めたコーラシイ。

「・・・・・」

ヒビは大きな亀裂となり、やがて

「ふんっ！」

ガラガラガラッ！！

「わわわっ！！」

崩れ落ちる壁。

「案外柔らかかったね・・・・・」

「う、うん」

これでパーツが探せる。

「・・・オリマー、下がつて」

「ん？ どうした？」

先を見ると、原生生物、なのだろうか。人影が見える。

「あれって・・・・・」

「この星の生物だよ。危険だから下がつて」

やはり原生生物なのか。でも人の形をしてるつてことはコーラシイは特別なのかな？

やがて、こちらに気付いたのかゆっくりとこちらへ向かってくる。コーラシイは、ゆるりと構える。

「あなたは、誰？」

人影に問いかける。

「・・・・ 答える必要、ないじゃない」

人影は応える。瞬間、人影が消える。

ドオオオオンッ！！

気付くと人影は先程のところにいた。

コーラシイは腕をクロスさせて、1mほど後ろにいた。ギリギリのところで防いだのか。

「そんな・・・私の攻撃を防ぐってことは・・・あなたも”フェア

リー”なの？」

「あなたも……？あなたは誰なの？」

人影は目の前まで歩いてくる。

コーリィは身構える。

「『』、ごめんなさい。もう何もしないわ」

人影は見えるところまで出てくる。

「？あれ……コーリィが、一人？」

コーリィそつくりの少女。ただ違うのは全体的な色が黄色いこと。

「私はセント。あなたと同じ”フェアリー”よ」

「ふうん……。あたしだけじゃなかつたんだ」

「！」

オレに気付いたのか、ジリジリと後ずさりする。

「ああ、安心して。この人はキャプテン・オリマー。この星に落ちてきたヒトだよ」

「ヒト……？」

「あ、ああ。今コーリィに協力してもらつてバラバラになつた船のパーティを集めてるんだ」

「そ、そうなの……」

まだちよつと怯えているようだ。

「ううん……大丈夫だよ、何もしないから」

右手を差し出す。

「つ！」

ズザザーッ！

もの凄い勢いで後ずさる。

「・・・・・・・・」

慣れるまでには時間が必要みたいだ。

「そうだ、セント。ちょっと聞いてもいい？」

「な、なに……？」

コーリィが問いかける。

「『』の辺りに変な機械落ちてなかつた？」

「変なつて・・・」

「いいからいいから」

反論しようとするオレを制止して答えを待つ。

「・・・」

しばらく黙考し、記憶をたどる。

「あ、そういえばあつちのほうに落ちた」

セントが指差した方向を見ると、先程のような白い壁があった。

「あつちつて・・・壁じやん」

唖然とするオレたちを尻目にセントは壁に向かつて歩いていく。

「私のオーラン、この壁の向こうにあるの」

「ふうん・・・どうやって行くの？」

ユーシイの問いかけにニッコリ笑つてみせると

「ふつ！」

フワツとセントの体が浮き上がる。

そのまま壁の上に乗つてしまつた。

「へえ～、すっげえ跳躍力だなあ～」

「そ、そんなことな わ、わわわっ！」

下からオレが呼びかけたからなのか、壁の上で後ずさりしたために、壁の向こうに小さな体は消えてしまつた。

「…セントっ！」

ユーシイは壁に向かつて走り込む。

「はあつ！」

そのまま思いつきりグーで壁を殴る。

たつた一撃で白い壁は脆くも崩れ去つてしまつた。

「セント！大丈夫？」

「・・・・うわー」

呆然としているオレとセントの顔が合つ。

「・・・は、ははは」

「・・・ふふ」

苦笑ともいえるべき笑顔をお互いに交わす。

「？」

ヨーシィは訝しそうにオレとセントの顔を見比べる。

「さて、セント。その機械のどこまで案内してくれるかな？」

「うん、いいわ。こっちよ」

トン、トン、と大きく跳躍しながら先に進む。

セントに先導を任せて、オレはヨーシィと並んで歩く。

「それにしても、ヨーシィは強いな」

ヨーシィに話しかける。

「そんなことないよお～。わたしにだつて苦手なことはあるもん」

「ふうん・・・たとえば？」

「う～ん・・・水とか」

「水？」

「うん。わたし、泳げないんだ」

てへへ、と舌をちょびっと出して恥ずかしそうに笑う。

「ふうん・・・」

ヨーシィは水の中に行けないってことか。

水中に入ったパーツはどうすればいいんだらう・・・。

「・・・セントもかなあ」

「う～ん、どうだろ。後で聞いてみよっか」

「ああ」

そういう話してこらううちにセントが立つてこる場所にきた。

「これよ

「こいつは・・・永久燃料ダイナモか」

無限に使える燃料・ダイナモ。これで夜の電気代をケチらなくとも

オッケーだ。

「これを、さつきの宇宙船つてこらうに運べばいいのね

「そりなんだけど、こいつあちょっと重いからな～」

3人で運ぶにはちょっと重いように見える。

「だいじょぶだいじょぶ。あたしとセントでなんとかするよ」

「大丈夫か？」

「任せて。コーラー、そつち持つてくれる?」

「オッケー」

左右対称に構えるコーラーとセント。オレはとこうと、オロオロするばかりだ。

「せーのつ!」

「よいしょ、つと

軽々の持ち上げる。

「あら、思ったより軽いのね」

「そうだね。これなら簡単に運べるね」

「それじゃあ、そろそろ口が暮れちゃうから早く運んじゃいましょう

「・・・すげ」

唚然とするオレを尻目に、ドンドン進んでいく。

この星の生き物たちはみな力が強いのかな?

「オリマー、何やつてんの~?」

「置いてくよ~」

「え? あ、ちよつと待てよ!」

慌てて後を追う。

「あ、ちよつと待つて。コーラー」

「ん? どうしたの?」

二人が立ち止まって、何やら巨大な空き缶?のようなものの中を覗き込んでいる。

「やつぱり。あつたわ」

セントが中から、何やらサッカーボールくらいの大きさの岩を持って出てきた。

「・・・それは?」

あとから追いついて、その岩をしげしげと眺める。

中にとても大きなエネルギーが詰まっていることは見て取れる。

「これは通称バクダン岩。大きな破壊力をもつ、とっても危険な代物よ」

「へえ……って、持つてて大丈夫なのか?」「

とても危険、と聞くと、思わず警戒してしまつ。

「ふふふ、大丈夫よ。私が持つている限り爆発しないわ」

「ふうん……」

コーリーの方をチラリと伺う。

ズザザーッといった感じで後ずさりした。

コーリーが退いているところを見ると、バクダン岩はセントにしか扱えないようだ。

「でも、何に使うんだ? そんな危ない物」

「そうね……」

辺りをキヨロキヨロと見回して「うわわわわわ」と岩の壁のところに行く。

「うん、これくらいなら一発で十分ね」

セントは岩の下にバクダン岩を置く。

「離れて!」

オレたちは急いでその場を後にする。

ドオーンッ!!

鈍い爆発音。

「戻つてみましょう」

先程、岩の壁があつたところにはボッカリと大きな穴が開いていた。

「すっげえ……」

「これなら原生生物だつてひとたまりもないね……」

「そうね」

そういうえば原生生物つてまだこの一人しか見たこと無い。

「なあ、他の原生動物つてどんな形してるの?」

「そうね……。見たほうが早いと思うよ」

そういうてコーリーは先程壊した岩壁の向こうへと向かう。

コーリーが指差したところに、影が動いている。

「・・・あいつは？」

よく見ると、なにやら小さな子供のようなシリエットだ。もつちよつと近くでみよつと近づいてみる。

「あ、ダメよ！無闇に近づいちゃ

「え？」

こちらに気付いたのか、テコテコと向かってくる。よく見ると小さな牙を持っている。獰猛な証拠だ。オレは敵の攻撃に対してもう構える。ガ

ガッ！！

上から降ってきた何かによつて、その原生生物は倒れる。

「ふう・・・・ダメよ、無闇に近づいちゃ」

それはセントだつた。

「ゴメン・・・・

改めて、原生生物を見る。

「これは小チャッピーだね。まあまだ並くらいだね」小チャッピーってことはチャッピーってのはこれの大きくしたやつ、ってことなのだろうか。

「こういう原生生物の死骸も私たちの栄養分になるの」ここからだとセントのオニオンの方が近いといつことで、セントのオニオンへ向かう。

やはり、ユーシイのオニオンと同じ形だが、色は黄色い。原生生物の死骸もペレットと同じように吸い込まれる。だが、ペレットとは違い、ゼリー状にはならずに固形化していく。無駄などころを省いた肉、といった感じだ。

「はい、ユーシイ」

「あ、ありがと」

一人で分け合つ。

オレには大地のエキスは食べられない。いや、食べられないことはないが、口に合わないのだ。

宇宙船から持ってきた干し肉をかじる。

「ねえねえ、オリマーの食べるそれってなに？」

「これか？これはオレの星で保存用に作られる食べ物だよ。食つてみるか？」

「うんっ」

ユーシィに干し肉を一切れ分けてやる。

「いただきま～す あむつ」

大地のエキスを食べるとき（？）と同じようにチュウチュウと吸い上げるが、やはりエキスとは違う味がするのだろう。不思議そうな顔をして、すぐ口を離してしまった。

「う～ん・・・ちょっとしようばいかな」

「それは、吸うんじゃなくて、かじるんだよ」

「そうなの？ 噛めばいいのね」

思いつきり噛み付く。

そのままクチャクチャと無言で租借すること数分。

「・・・かつた～い。これホントに食べられるの？」

「そうだな～・・・。ホントは煮たり焼いたりするんだと思つよ」  
実際は、煮たり焼いたりしてやわらかくして食べるものなのだ。  
ここには火がないから、そんなことできないけど。

「そつか、焼けばいいんだね」

ユーシィは手当たり次第に葉っぱを集めめる。

「・・・何してんの？」

「まあ見てなさいって」

葉っぱを一纏まりにすると、両手を翳してなにやら呪文らしきものを唱える。

「大地を燃やすは火の力・・・出でよ、フア・イア・エンチャント  
<！」

ユーシィの指先から野球球大の火球が生まれる。

その火球を葉っぱの塊に移す。

たちまち火があがる。

「へえ、凄いね」



「お？・・・じゅあいうこいつのせ、どうかな？」

今度は両手を駆使して「チラチラ」と擦る。

「あは、あはははははははー何何何なのー？」

「おひ、起きたか？」

「起きました！バツチリ起きましたあー！だから止めてー」

両手を、わき腹から離す。

「まあ、今回はこれで許してやうつか。新しい発見もあつたし、ね

「はあ・・・はあ・・・」

荒くなつた息を整えるセント。アント

そして

「スピー・・・スピー・・・」

未だ夢の中のコーライ。

「あれだけ騒いでたのに、よく起きないなあ・・・」

とつあえず、頬をペシペシする。

「お~い、起きるコーライ」

「んん~・・・スピー~」

かなり深いところまで行つてこらゆづだ。

「そうね・・・フニアリーは皆わきの下が苦手ね」

思い出したよつてセントがつぶやく。

「ふむ・・・」

わきの下をツヅツと描ぐながる。

「きやつはー」

身を捩つて逃げるコーライ。

「・・・ふ~ん」

なるほどお~。フニアリーってのも案外脆いのかもね。

「え~いつ一起きら~！」

「んあつ~。きやはははつ~。いや~つ~。」

「起きるか~？」

「起きます~起きます~起きるからあ~・・・スピー~」

「起きる気ないだろ~！」

「起きます~起きます~起きるからあ~・・・スピー~」

「わやつはまはまはまつーこやまうホントマジ無理だつてーつー。」

「じやあ起れ!」

「もう～！分かつたよう・・・」

むつくり起き上がりつて伸びをする。

それからセントを視界に捕らえる。

「…あなた何教えちゃうてんの？」

田をギラギラむせながらソフテルを眺めるナーナシイ。

「や、わあ何の！」とかしづら・・・？」

あくまで白を切るセント。

「うわー！ これが

一人して、「田」、「口」と転がりながら笑へあつ。

「あ、仲がいいのはいいけどだなれども。」

「ほら、一人とも。そんなことしてないで早くパーティ運ばないと」

「あ、そつだつた

「はふう・・・助かつた・・・」

一人は立ち上がりつて、服を叩く。

「それで、どうもひすく田が暮れちゃうね」

卷之二

•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•

•

「スル」

やはり疲れたの

「う」

「ありがとう、二人とも」

「あら、いいのいいの？ 今田は新しい友達もできたりしね」

一人で笑いあう。仲睦まじい光景といえる。

「え～っと・・・」

「何探しんの?」

「いや、ちょっと・・・。あ、あつた

近くにあつたペレット草に向かう。

「?」

「?」

一人して不思議そうな顔をする。

「ふう・・・」

肩の力を抜いて、大きく息を吸う。

「せいつ！！」

一本のペレット草に向けて、正拳を放つ。ペレット草は黄色と赤いペレットを残して地中に戻っていく。

昨日気付いたんだが、ペレット草は次の日になればまた生えてくるらしい。

「コーリー、ほら。セントも、どうかな?」

二人に渡す。

「セントは黄色いから黄色の方がいいんじゃないかと思つて」

「ふふ、正解」

二人はそれのオーランへとペレットを運ぶ。

しばらくして、二人は戻つてくる。

「今日はもう、日が暮れるわ」

「そうだね。今日はここまでにしよ」

「ああ、そうだな。明日はもうひとつ探索範囲を広げてみよう」

「うん」

宇宙船を見上げる。未だ28つのパーソンが欠けたこのマシン。

「こんなオンボロで宇宙になんて戻れるのかしら」

「あ、言つたなこのやうへ」

オンボロ、と言わるとカチンとくる。両腕を振り回してコーリー

を追いかける。

「あははははつ、捕まらないよ～」

「いのやろ～！待て～！」

正直、確かにこんなオンボロで宇宙に戻れるかどうかは分からぬ。でもついこないだまでは宇宙を漂っていたのだ。直せばまたきっと戻れる。

・・・というか、戻れないと困る。ものすごく。でも、戻っちゃつたらユーシイたちともお別れ、か。それはちょっと寂しい気もある。

「捕まえたつ～！」

「きやつ」

二人でもんどうつて倒れる。

もうすぐ日が暮れる、赤く染まつた空を見上げて、一人は何を思うのだろう。

・・・

今日の日記。

今日はセントという心強い仲間が増えた。

未だパートはだいぶ欠落しているものの、この分なら、30日以内に全てのパートを探し出せるかも知れない。

今日は初めて原生生物と出会った。

原生生物は皆、人の形をしているようだ。

とても凶暴そうに見えたのだが、中にはユーシイやセントのよう、心優しい生物も居るのだろう。

永久燃料ダイナモを見つけ出し、これでまた、宇宙への道を一步前進したことになる。

明日もこの森を探索してみよう。

追記。

今日はよい発見をした。

フェアリーについての弱点的なものを発見したのだ。  
フェアリーは俺たちヒトよりも五感が鋭い。それ故になにかと刺激  
に敏感なのだ。

それと、水は苦手なようだつた。水中に落ちてしまつたものはどう  
しよう・・・。

水に強いフェアリーなんているのだろうか。いざとなつたら自分で  
いくしかないか・・・。

## 第一章 新たなる出会い（後書き）

新たに心強い仲間が増えて、希望も高まってきたオリマー。この先に何が待ち構えていようと、この一人がいればへっちゃらな気がしますね。でも水はダメといつこの一人。水中戦ではオリマーが大活躍！・・・か？（笑）。今回の内容には、作者の趣味嗜好をふんだんにブレンド（笑）。普段は強いけど、ある一点をつづくと途端に脆くなる女性つて、魅力的ですよね（謎）。この趣味嗜好は、今後の作にも影響を及ぼすかもしれません。「ああ、コイツはこういう趣味なんだな。このヘンタイめ」と思つていただければ幸いですw

## 第一章 芸術はバクハツだ！（前書き）

ピクミンの世界の中でバクハツといえば・・・そう、バクダン<sup>音</sup>で  
す・・・

## 第一章 芸術はバクハツだ！

遭難三日目（希望の森）

「今日の目標は、向こう側を探索する」  
森の南側を指差す。

昨日破壊した岩の壁の向こうだ。

「オツケー」

「じゃあ早速行きましょう」

壁の向こうに来た。

昨日倒した小チャツピーは復活していない。  
原生生物は植物より再生が遅いようだ。

「？ねえ、変な音しない？」

「ん？」

言われてみれば、さつきからポーン、ポーン、という音が遠くで聞こえている。

「何かしら……？」

歩いていくことに大きくなる音。

「この辺りからだね……」

耳を澄ますと、確かに音はハツキリと聞こえる。

「あの上じゃないかしら」

セントが指差したのはちょっととした高台になつていていた。

「あたしじゃあの上には行けないよお～」

ユーシイの跳躍力ではさすがに上に届かない。

「私なら……」

セントが跳躍する。

素晴らしいジャンプを見せるが、やはりあとちょっとのところで届かない。

「うーん……困ったな」

3人で頭を抱える。

3人寄れば何とやらとこつが、名案となるものは浮かばない。

「IJの下にある壊しちゃえればいいんじゃない？」

ゴーシュが下の岩をペシペシとはたく。

「そんなことしたら上に載つてると上にのつてているのは”気まぐれなレーダー”だろ」

結構テキトーに地図を作つたりする気まぐれなヤツだが、大事に扱えばそれなりに応えてくれる。

案外デリケートなので慎重に扱わなきゃダメだ。

「どうにかして上に行かないと……」

「そうね……あ」

セントが何か思いついたようだ。

「ねえ、オリマー。私を投げてくれる？」

「投げる？」

唐突な注文だ。

「あなたの力と私の跳躍力を合わせれば届くと思つの」「確かにそうだろ」

「けど……」

まあ試してみる価値はあるだろ。

「んじゃあ、ちょっと試してみよ」

「お願いするわ」

バレーのレシーブのよつに構えるオレ。

正面に立つセント。

「行くぞっ！」

「ふつ！」

オレに向かつて跳ぶセント。

両手の上に飛び乗つたのを確認して、一気に打ち上げる。

「おりやあっ！」

「せじつ！」

オレの打ち上げと同時に跳躍するセント。

小さな体は岩を大きく超えてジャンプする。

「わわわっ！た、高すぎー！」

アタフタするコーライ。

「ふふっ、大丈夫よ」

空中で一回転して岩に降り立つ。

「良かつたあ～・・・」

ホツと胸を撫で下ろすコーライ。

「どうだ？セント。何かあつたか？」

下から尋ねる。

「うん、変な機械が二つあるよ」

岩から顔を出して答える。

変、という言葉に少々ムツとくるが、今は抑える。

「持つて降りれないか？」

「やつてみる」

そつといつて引つ込む。

多少手間どつたが、どうにか二つともおろすことに成功した。

「これは気まぐれなレーダーと”ただものでないネジ”だな」  
見た限りではこの二つで間違いないようだ。

「ただものでない、つて、何処が？あたしにはただの”でつかい”  
ネジにしか見えないんだけど」

「ふつふつふ、素人には分からぬスゴさがあるのさ

まあ何に使うかは今のところ検討中のパートだが。

「さて、ちゃつちゃと運んじゃおうぜ」

「そうだね～」

コーライとセントでレーダーとネジを運ぶ。

最短距離で戻るのとしたら、途中に黒い岩の壁が立ちふさがった。

「うーん、これは一発じや壊せそうに無いなあ・・・

確かに、白い岩よりもちょっと硬い。

「待つてて。ちょっと探してくる」

セントは近くにあつた空き缶に向かった。

しばらくして、3個のバクダン瓶を持って出てきた。

「これだけあれば、大丈夫でしょ」

バラバラとバクダン瓶を置く。

「さ、離れて」

岩山の後ろに隠れる。

もの凄い爆発音と共に、黒い岩の壁は崩れ去った。

「ん~、ちょっとやり過ぎたかな」

岩の壁の横の土でできた壁までもを抉つてしまつて、

「今の音で原生生物が目覚めていないことを祈るよ」

岩壁の向こうは、もう着地地点だつた。

レーダーとネジを船に収納する。

「よし、これで地図が見れるよ！」

周辺地域の地図が表示できるようになつた。

ついでに、地図に他のページの位置を示す印も出ている。

意外に役に立つ部品だ。

「あれ？ いくつか動いてるページがあるな・・・」

よく見ると地図の印がちょっとずつ動いている。

「それ、多分原生生物に持つてかれてるんだよ」

「餌だと思ったのかな・・・」

硬くて食べられるものじゃないのに、と思つ。

「でも間に水場があるから取りには行けないね」

「そうだな・・・。そういえばさ、セントって泳げるのか？」

さつき疑問に思つてたことをきいてみる。

泳げないなら他の方法を考えるしかない。

「ゴメンなさい、泳げないわ」

「そつか。いや、いいんだ。気にしないでくれ」となると、何か他の方法を考えるしかなさそうだ。

「これで回収できたページは4つ。あと一つあればもうひとつと高く飛べるようになるはずだ」

「そしたら他のどこにも行ける、ってことだね

そう、あと一つあればこの森の先にある樹海へ降り立つことができる。

「今日はもう遅い。早く帰つて寝よう」

「そうね。それじゃあ、オリマー。おやすみ

「おう、おやすみ~」

二人と別れて、宇宙船へと戻る。

明日はもう一つのパートを見つけて、次の段階へレベルアップだ。

・・・・・

・・・・・

・・・・

今日の日記。

今日も希望の森を探索した。

セントのおかげで大分探索範囲が広くなつた。

今日は気まぐれなレーダーを回収したことでの、地図が見れるようになった。

これで回収していないパートの位置を知ることが出来る。

どんなに困難な状況でも、前に進んでいけばいはず、きっと解決するのだ。

## 第一章 芸術はバクハツだ！（後書き）

バクダン岩、凄い威力でしたねー。これからも活躍も期待が高まります。

セントさんは、この章では書いてないんですけど、実はとっても目が良いんですよー。コーチィにはちょっと劣るけどパワーもあります。あ、そうそう、前回のナゾ能力についてなんですが、あれ、実は上手く設定できません（爆）。“フェアリー”たちの持つ特殊能力、と思っていただけでよいかと思います。もう一人の青い娘にも何か一つ能力を、と思っています。

さて、次の章から私の趣味嗜好が飛躍的に突出してきます（笑）。実際の内容とは徐々にかけ離れていくので、ご覚悟を。

## 第三章 原生生物と妖精（前書き）

さて、今日も「希望の森」での探索が始まります・・・

遭難四日目（希望の森）

今日も希望の森へと降り立つ。

昨日回収したレーダーのおかげで今後の予定が立てやすくなつた。今日も近くにある2個のパーソを回収しよう。日程に余裕を持たせたい。

「・・・っと。オヤマー、行き止まり」

田の前には黒い土でできた壁が立ちふさがる。

「さて・・・岩よりは硬くないはずだから、グーで殴つてりや壊れるんじやないか？」

「そだね。やつてみる」

コーリィは壁を殴り始めた。

白い土の壁ほどではないが、徐々にヒビは入つていて

「あ、ねえ。あそこ、通れるんじやない？」

セントが指差したのは壁のちょうど横に生えている木の根。そこに小さな穴がある。

「そうだな、これくらいなら通れ無くもないか

穴を越えて壁の向こう側へと出る。

「コーリィ。ちと先の様子みてくるわ」

「オッケー。その間にここ崩しとくから」

コーリィを置いていくのは多少心許ないが、セントがいるから安心できる。

途中に大きな水場を発見した。

「お、向こう側に壁があるな」

対岸側に白い土でできた壁があつた。

「コーリィとセントは泳げないからあそこはまだ無理だな」

「そうね」

とりあえず水場を後にし、先へ進む。 と。  
ガサツ。

「！誰だッ？」

背後から物音がした。

多分原生生物だろう。  
一瞬見えた人影は「妖精か・・・」とつぶやいたあと目の前から消えた。

「今は・・・？」

「あれはチャッピー。もつとも多く生息している原生生物よ。昔は私たちフェアリーとは仲が良かつたのよ。」

噂だけど、と付け加えるセント。

「とにかく警戒しなくちゃな」

「ええ

そのまままっすぐに進んでいく。

目の前に、人影。

「ようじや、”フェアリー”。おつと、”ヒト”も一緒にいたか  
オレたちを出迎えたのは先程のチャッピーだった。

ここはチャッピーの巣だろうか。

後ろには”ショックアブソーバー”と”ノヴァブラスター”が見え  
る。

「・・・そこを通してもらおうか」

「ならぬ、と言つたら？」

「力づくでも通してもらうッ！」

前傾姿勢を取るオレをセントが制す。

「待つて。この人、悪い人じゃない」

セントは前方に構えるチャッピーを見据える。

「さすがはフェアリー。ヒトなどと違つて物分りが早い」

「なんだと・・・！」

「まあまあ抑えて。私は何も邪魔をしに来たわけじゃありませんよ  
相手に敵意は見られない。」

「じゃあ何をしたきたの？」

「私は子を育てる身です。子にはそれなりの栄養源が必要だ」

「・・・何が言いたい？」

「話は簡単です。ペレットを集めていただきたい」

「ペレットを？」

原生生物もペレットを栄養分としているのか？

「はい。もしあなた方が青いペレット『1』を10個集められたら、これはお返ししましょう」

後ろのペーツたちを指す。

「わかった。10個でいいんだな」

こんなところで時間を食つわけにはいかない。

「それではお願ひします。私はここで待っています」

オレたちは元来た道を引き返した。

・・・・・

・・・

・

「ふう～ん、青いペレット『1』を10個か～～～～～」  
ゴーシイは壁を崩し終えて休憩していた。

「でもや、『1』つて何？」

さつきから疑問に思つていたことを問い合わせる。

「ほり、ペレットには中心に数字が書かれているでしょ？」

「そういうえばそうだな」

ペレットには『1』とか『20』とか数字が書いてあつたのを覚えている。

「あ、わかつた。『1』つて書いてある青いやつを10個、つてことかな？」

「ピンポン、正解」

「よし、じゃあ早速手分けして集めよう」

「オッケー」

「了解」

3人散り散りに散る。

オレはその辺のペレット草から取ることにした。  
ペレット草には色が固定されているものと、ルーレットのようにな  
わるものがある。

この地域にはルーレットは多くない。

「青いペレット草を探さなくちゃ……」

・・・・・

「ふう・・・」

とりあえず5つ手に入れた。

ゴーシイたちとあわせれば10に達するだろ？  
程なくしてゴーシイたちは帰ってきた。

「あたしは3つ」

「私は2つ」

「これで10個だ。」

「よし、さっさのとこへこへ」

・・・

「用意できましたか？」

「ああ。約束どおり、10個だ」

「おお、ありがとうございます。それではお約束どおり、これらは  
お返ししましょう」

一步下がってパーティへの道を開ける。

「ありがと、チャッピー」

「いいのです。私にはそれがどんなものなのか、どうやって使つか  
か、分からぬのですから」

「そうだな・・・」

改めて一つを見上げる。ヒトに授けられた科学という名の力。

俺たちヒトには便利であつても、チャッピー やコーシイたちには“ワケの分からぬ何か”にしか映らないのだろう。

「こいつは、一人づつ、つてワケにも・・・」

これらのパーティは主に外部へのアタック時に使用するものだ。ちょっとした衝撃で何が起こるか分かったものではない。ちょっと危険な代物だ。

「ああ、それなら私が力をお貸します。オマエたち、出であいで」チャッピーが茂みへ呼びかけると、小さいチャッピー・・・小チャッピーがゾロゾロと出てきた。

よく見ると、この小チャッピーたちは、頭にコーシイたちと同じような葉っぱが付いている。

チャッピーにも付いているといふことは、もしかしたらこのチャッピーたちとコーシイたちは遠い親戚に当たるのかもしれない。色もどことなくコーシイに近い感じを受ける。

「オマエたち。フエアリーを助けるんだ」

小チャッピーたちはコーシイとセントと並んでパーティを持ち上げる。

「あら、手伝ってくれるの？ ありがと」

セントが小チャッピーに礼を言つ。

小チャッピーたちはちょっと照れ臭そうにしてくる。

「それじゃ、宇宙船へ運んでくれ」

フェアリーと小チャッピーは協力して、宇宙船へパーティを運んでくれた。

これで6個。宇宙船は次の段階へとレベルアップする。

「これでもっと高く飛べるぞ」

この先には樹海が広がっている。

そこにもパーティは「ロロロと転がつてゐるのだ」、危険も多くなるだろ？。

「ありがとう、チャッピー。それに小チャッピーも」

パーティを運ぶのを手伝ってくれたチャッピーたちに礼を言つ。

「いいのです。元々、私たちは戦が好きではありません。あなた方とは、友好関係を築いていきたい」

「そつか。それは助かる。今度また困るようなら手を貸してほしい」

「その時は、喜んで」

友好の証として握手を交わす。

ここに、星と星の小さな友好関係が生まれた。

今日の日記。

今日は2つのパートを回収した。これでドルフィン号はまちよつとパワーアップする。

明日はこの森の先にある樹海へと行つてみようと思つ。森のチャッピーたちと友好関係を築いた。

これからは心強い仲間となつてくれるだらう。樹海ではどんな出会いが待つているのだらう。  
・・・水場に強い仲間がいるといいが。

さて、今回はオリマーにも活躍の場を、ということで原生生物・チャッピーを登場させました。チャッピーもピクミン同様、擬人化して登場します。今回出来たチャッピーには性別は設定されていません。“子を育てる身”というのは男女どちらも当てはめることができますからね。日本語って便利だ。

ユーシィは今回放置気味でした。ごめんなユーシィ。次は活躍させるよ・・・。

そういうえば、この物語恋愛物に発展することはあるんでしょうか・・・。相手は異星人と言えど姿形は女の子。オリマーはといえば、若き青年であります。ありえなくはないでしょ・・・。ゲーム本編では家庭を持つていることになつていていますが、今回は若き頃に戻つて頂いています（笑）。果たしてこの三人、いや青い子も入れると四人ですか。愛に芽生え、恋に落ちることはあるんでしょうか。待て、次回！（笑）

#### 第四章 新たな出会いとパンもみわ（繪書セ）

わあ、今日は森の奥に広がる樹海へと降り立ちます。  
果たしてどんな出会いがオコマーラたちを待ち受けているのでしょうか  
か・・・

## 第四章 新たな出会いとパンもん

遭難四日目～樹海のへん～

「ふあ～あ・・・」

今日で遭難して4日目。家族や同僚も心配しているはずだ。早く帰ろう。

「ん～と・・・今日は樹海へ降りてみよう。コーチィ、おきてるか？」

『ん～・・・?』

「まだ寝てるか」

『ん～・・・つてオリマー！？あれつ、ビニリーニングの？』

「多分、お前のポケット」

『ポケット？・・・ああ、コレね』

初日に渡した通信機。もしもの時の連絡手段として渡しておいたものだ。

一応セントにも渡してある。

『お～いセント～。そつちはどうだ～？』

『あら、オヤマー。おはよう、随分早いのね？』

『まあな。一人とも聞いてくれ。今日の予定を話す』

今日は樹海にぽっかりと開いた空間へ降りてみようと思つ。レーダーによると、結構多くのバージが流れているようだ。

『ふ～ん』

『そこは危険な原生動物が多く住んでいるわ。大丈夫かしら？』

『その点はまあ大丈夫だろう。冒頭ならあいつらも大人しいし、森のチャッピーたちみたいに友好的な奴もいるかもしれない』

『そうだね。皆が悪い人つて訳じやないもの』

「あと、レーダーに変な反応が出てるんだ。それも確認してみよう

と思つ

『変な反応?』

「ああ。ゴーシィたちのデーターをインプットしといたんだ。ゴーシィは赤、セントは黄色に発光する点なんだが、樹海に青い点があるんだ」「うん、わかつた

『青?』

『また別のフェアリーがいるってことかしら?』

「多分、そう見ていいだろ? できれば仲間にしたい。協力してくれ」

『任せで』

「頼む。よし、じゃあ樹海に向けて出発だ!」

轟音と共に木々を煽りながらドルフィン号が着陸する。ドルフィン号を囲むようにゴーシィたちのオーランも着陸。中から二人が出てくる。

「よし。まずは青い光点を見に行け!」  
は水場が多い。足元に

『気をつけて』

「うん!』

とりあえずレーダーで位置を確認しながら進む。

すぐに壁に突き当たる。

「これは田くて柔らかそうだな。ゴーシィ、頼む

『あいよ!』

拳を握って気合を溜める。

『はあつ!』

一撃で脆くも壁は崩れ去った。

『さつすが

『えへへ』

『ん・・・?』

レーダーに反応。パツだらうか?

『どうしたの?』

「いや、近くに」ページがある「ひっこ」さて、どうかな?「

辺りをウロウロする。

反応が出てこないので、どうやら昨日の上りっこ。

「こんなに高いこと誰かな?」

「なにか使える物があるはずだよ」

「ねえ、これなんかどうかしら」

セントが長い枝を持ってきた。

「長さも太さも丁度いいかな。これなら……あのあたりから渡れそうだ」

ちょっと着陸地点に戻ったところ、岩山を正面に見据えた場所。

「ん~・・・ありやあオートマチックギアだな。あれなら小さいし、持つてこれるだろ」

セントから棒を受け取り、岩山に掛ける。

「じゃ、ちょっと行ってくる」

「気をつけ」

落ちないよう、慎重に、慎重に・・・

「よ・・・つと。ふつ。無事に渡れたな。あとほ・・・」

オートマチックギアを持つ。

「これ持つて渡るのは流石に難しいな・・・  
バランスが取りにくい。

二人に下で受け取つてもらうか。

「お~い、二人とも~!」

「なに~?」

「悪いんだけど、下で受け取つてくれるか~?」「持つて渡るのは

無理っぽい~」

「わかった~」

岩山の下まで回つこむ。

「頼むぞ~。それつ~」

「よいしょつと~」

しつかりキャツチ。

「じゃあこれ持つていくわね」

「うん、お願ひ」

「終わつたらこっち来てくれ」

「分かつてゐるわ」

セントにオートマチックギアを任せ、俺たちは青い反応へと進む。

「こっちだ」

「お、オリマーツ。そっち水場・・・」

「ん? ああそうか。ユーシイは水が苦手なんだよな。仕方ない、ちよつと待つてくれ」

「う、うん」

ユーシイを水際へ待たせておく。

「ん・・・? なんだ、反応が弱く・・・ ツー」

目の前に、少女が倒れていた。

「おい、大丈夫か!」

駆け寄つて、抱き起こす。

「おい、しつかりしひー!」

「う・・・うう・・・」

「大丈夫か!?」

「う・・・お・・・」

「お?」

「おなか、すいた・・・」

「腹ペコなのか。よし、待つてろ。何か食べるもの・・・」

干し肉はダメだ。ええっと、何かないか、何か・・・。

ペレット草。色は青い。

この娘も青を基調としているから・・・。

「あれだ!」

ペレット草に駆け寄り、そのままパンチ。

「つらあ!」

青いペレットを落とす。

それを持って、さつきの子の元へ。

「おい、お前のオーランは！？」  
「…………それ……」

俺の後ろを指差す。

振り向くと、たつた今オーランが起動したところだった。  
「よし。これを……こつすればいいのか……？」

ペレットを、真ん中に翳す。

オーランから光が溢れ、ペレットが吸い込まれていく。  
しばらくすると、大地のエキスが吐き出される。

「ほら、これでいいか？」

「うん……ちう……」

少女は大地のエキスを一瞬にして吸い干した。

「ふはあ……」

「よつぽど腹減つてたんだな……」

「あなたは……？」

「あ、俺オリマー。この星に不時着して、今宇宙船のパーティを捜してること」

「私……スズ。青のフェアリー……」

「君もフェアリーなんだね」

「君も……？」

「ああつと……とりあえず、立てるか？」

「うん……」

青を基調とした姿。

やはりコースィたちに酷似している。

あれ、でもここって水場……。

「スズは水は苦手じゃないんだ？」

「うん……。私は特別なの……違う……皆特別だけど、私は水だっただけ……」

「そりいえばそうだなあ。コースィなんかは火が得意だし」「コースィって誰……？」

「ああ、赤のフェアリーさ。今一緒に宇宙船のパーティを捜してもら

つてるんだ」

「赤・・・。フェアリーは私しか残つてないと思つてた・・・  
「他にも黄色のセントもいる。一人ともこの辺りには詳しくないんだ。できれば案内して欲しいんだけど・・・」

「うん・・・いいよ・・・」

「ありがとう。一人にも紹介するよ。」つちだ

「俺はスズを連れて、ユーシイたちの元へ戻つた。」

「あ、オリマー。無事だつたんだ、よかつた・・・あれ、その子は？」

「フェアリーさ。スズつていうんだ。水場が得意らしい」

「ふうん、そうなんだ。あたしユーシイ。よろしくね  
笑顔で手を差し出すユーシイ。スズはといふと・・・オリマーの後ろに隠れてしまつていてる。

「あ、あはは・・・どうやら人見知りするタイプらしいな・・・」

「ん~、せっかくだから仲良くやつていきたいなあ・・・」

「そうね。一緒に旅するんだから仲良くしなくちゃ。あ、私セント。よろしくね」

「うん・・・よろしく・・・」

新しい仲間が増えた。多少人見知りはするが、水場に強いことは何よりもうれしい。

「さて、と・・・。ここからだと、この動いてるやつが近いな・・・  
つていうか近づいてきてないか?」

「なんだろうね・・・。多分、原生動物だと思うんだけど・・・」

「見て。あれじゃないかしら・・・」

セントが指さした方向を見ると、何やらずんぐりしたものが「ちりへ近づいてくる。

「何だあれ・・・パン?」

それは大きな食パンにそっくりだつた。・・・パンもじきと名づけた。その場で。

「こんな見たことないよ・・・」

パンもどきは、俺たちの横を素通りしていった。

「私たちのことアアウト・オブ・眼中ね・・・」

「別の目的があるのか・・・？」

後を追つてみることにした。

「あ、ねえ、見てあれ。ペレットを運ぼうとしてる・・・」

「あいつもペレットを栄養としているのか・・・」

「あ・・・青のペレット・・・」

「あ、おースズ。危ないって！」

パンもどきが持つていこうとしたペレットが青かつたからか、スズが単身向かつていった。

「スズちゃん、待つて！」

ゴーシイが追う。

「オリマー、私たちも！」

「おう！」

スズの後を追う。

「私のペレット・・・返して・・・」

「%\$#&\$”，\$」

なんだかよく分からぬこと言ひながら、ペレットを引つ張つていぐ。

どうやら渡すつもりはないらしい。

「離しなさいよ、この・・・つー」

ゴーシイのパンチが破裂・・・と思こさや。

ふよん

「わつ！？」

弾力に富んだ表皮によつて跳ね返されてしまった。

パンもどきは何事も無かつたかのように平然とペレットを引つ張つていぐ。

その先には、どうやら巣のようなものが見えた。

「お、おい、まずいぞ。巣に入られたら取り返せない」

「いや、こいつなつたら力勝負よ！」

## ヨーシイがペレットを掴む。

「このお～！」

—  
{  
%  
"  
#  
"  
%  
"  
%  
!  
?

獲物をとらえると察知したのか  
ハンモリ老にはすこし驚いて引く張

卷之三

11  
ノイバードの表記

「私の

スズも加勢する。が、やはり結果は変わらない。

「あ、もう、見てられないわね」

セントも一緒になつて二人がかりで引っ張る。

「%\$&#”！？！？」

おじいちゃんが優勢になってしまったみたいだ。そのままオーランまで

運んじゃえ

卷之三

卷之二

才二才以向十

そして、オーナーの下にたどり着く。

オーランはペレットが来たことを察知

ツトを吸い上げようとする。

・・・パンもどきを巻き込んで。

— \$ # & , % ! ? 「」

オニオンの表面に思い切りぶつかったパンもどきから、大きな浮き輪スペアスフードが飛び出す。

「…あ～」  
「…なるほど、こうなるわけか」

いへい。

「ん? なんだ、スズ?」

「・・・これ・・・むりっていい・・・?」

パンもどきを指す。

どうやら皿を回して動けなによつた。

「あ~、いいんじやないか?」

「ありがと・・・」

スズはズルズルとパンもどきを弓き擣つていった。せつとオーランまで持つていくのだわつ。

「・・・さて、と。これを宇宙船まで運ばないとな。・・・といつてもすぐそこか」

「これ軽いね。何に使うの?」

「これは水に浮くための道具さ。コノを身に着けておくと、水の中に沈まなくてすむんだ」

「・・・なんで?」

「ん~、説明すると長くなるから要約すると、中に空気が入つていて、それを浮力にしてるんだ」

「・・・ふーん」

「おまえ分かつてないだろ」

「な、何言つてるのよ」

「目が泳いでるつて」

「う・・・」

「ま、いいや。とつあえず運ぼつ」

「うん」

宇宙船へと運び込んで、今日の調査は終つた。

「ただいま・・・」

「お、おかえりスズ。どうだつた?」

「ん・・・お腹、いっぱい・・・幸せ・・・」

「そつか。今日はここまでだからな。あとせゆつくり休んでいいぞ

「ん・・・」

「それにしても、スズちゃんつて笑わないよね

「何でかしら？」

「さあて、ね。元々そういう性格なんぢやないか？」

「無表情というかクールというか。・・・青だからか？」

「ん・・・何・・・？」

「あ、いや、なんでもないよ」

「・・・？」

「こう3人で並ぶと三姉妹みたいで面白いな。

並べてみると、それぞれに特徴があることがわかる。ユーシイは天真爛漫、といった感じが漂っている。目が大きくてくりつとしているからだろう。

セントはちょっと呑呑田氣味なのが特徴かな。世に言う秀才タイプ、というやつだ。

スズはどっちかっていうとたれ田氣味で、ぼーっとした感じがある。

「・・・ふうむ」

「?どうしたの、オリマー? 考え事?」

「ああ、ちょっとな」

三姉妹とは言ったが、誰が姉で誰が妹だらう・・・。セントは長女タイプだよな。皆を引っ張つていぐリーダーシップがありそうだ。

ユーシイは一度中間あたりか。明るい性格が皆を和ませるタイプだな。

となるとスズは・・・。

「スズは、妹タイプ、ってことか・・・?」

「・・・?」

「え、何?」

「あ、いやいや、なんでもない」

「いかんいかん、つい口に出してしまった。

でも彼女たちのような妹なら、・・・ちょっと欲しいかもしねない。

「さて、もう日も暮れるし、そろそろ空に上がらう

「はい」

「ん・・・ それじゃあ・・・」

「ああ、ズズのオーランは向こうににあるんだっけ。後でこっちに合流してくれ」

「ん・・・」

「気をつけてね」

「うん・・・ 大丈夫・・・」

「ん・・・ つ。ふう。今田も一田<sup>じ</sup>苦勞様でしたと」

「明日もここを探索しよう。結構多くのパートが落ちているみたいだ」

「分かつたわ。それじゃあオリマー。おやすみなさい」

「おやすみ、オリマー」

「ああ、おやすみ。しっかり眠れよ」

俺も宇宙船に乗り込む。

「・・・ といつてもまだ寝床にすらなってないな・・・」

そこには中がぽつかりと穴を空けている。他のパートがあつたところだ。

「ま、でもマクラ代わりになるものはできたな」

今日手に入れたスペースフロートを頭の下に敷く。

「お、なかなかいいな、これ」

このふかふか感がなんとも・・・。

「はあ・・・」

・・・ といかんいかん。今日の日記をつけなければ。

遭難四日目。今日はオートマチックギアとスペースフロートを手に入れた。

どちらも用途は未だ未定だが、現段階でマクラ代わりになるものが あるのはいいことだ。

新しく、青のフェアリー、ズズを仲間に加えた。

水場が得意ということで、今後大活躍することは間違いなさそうだ。

今まで観察してきた土地にも、水場はなくあった。

その奥にも、まだパー<sup>ツ</sup>が眠っているはずだ。

スズがいれば、それらも手に入れることが出来るだろ<sup>ウ</sup>。

これでまた、帰還への希望が湧いてきた。

明日も樹海を搜索しよう。

ひりや<sup>リ</sup>、こくつかのパー<sup>ツ</sup>は原生生物によつて運ばれていた  
い。

これからどうどん凶暴な原生生物とも戦わなくてはならなくなるの  
だろ<sup>ウ</sup>か。

## 第四章 新たな出会いとパンもどき（後書き）

今回の主題は「青い子・パンもどき・比較」でした。いよいよ青の子・スズが登場して、探索範囲はグンと広がりを見せます。言葉少なでボーッとした印象を受けるスズ。水場も平氣といふことで、コーランたちとは違った場面で活躍してくれることでしょう。

そしてまた新しい原生生物・パンもどきの登場です。この子だけは擬人化しちゃうとパンもどきではなくなつてしまふのでそのままで、はい。

見た目的には巨大な食パンが蠢いている感じ？です。ルーツはイモムシかなあ。

ゲーム本編でも、ペレットを狙つて行つたり来たりする食パンが見られます。私は当初ペレットを引つ張ればいいことに気づかず、オーリーパンチで延々殴り続けた記憶があります・・・。

いよいよ三人娘がそろつたということで、改めて三人の特徴をピックアップ。出会つてから数秒で打ち解けられる人当たりの良さは、私たちも見習わなければならぬかもしませんね。

## 第五章 星と大地と新たな発見（前書き）

遭難してから五日目の朝。

さてさて今日は一体何が起こるんでしょうか。

## 第五章 星と大地と新たな発見

遭難五日目～樹海のヘソ～

「ふあ・・・よく寝た」

やはりマクラがあると寝心地が違うな。

『や～っと起きたよお～つ。オーリー／マ～つー』

「ん? なんだ、ユーシイか?」

『なんだじゃないでしょ～? さつきからずっと呼んでるのに返事してくれないんだもん。何かあつたのかと思つたよ』

『いやすまんな。つい寝過ごしてしまつたか』

『もう。あ、それよりセントが話があるつて』

「セントが?」

『ええ。聞いてオリマー。スズがいたところ付近にバクダン石がいっぱいあるみたいなの』

「それがどうかしたのか?」

『昨日歩いて分かつたんだけど、結構壊せそうな岩壁が多くあつたの。今壊しておけば後々楽になると思うんだけど』

確かに、宇宙船までの最短ルートを作るのはいいことかもしない。

「そうだな・・・。じゃ、そこ行つてみるか」

『ありがとう』

『あの・・・』

『ん? ビーフしたスズ?』

『近くの水の中に・・・変なの落ちてた・・・』

『どんなやつだ?』

『んと・・・ラッパみたいなやつ・・・』

『ラッパ・・・ん~、まあ行つてみれば分かるかな。よし、じゃあ

今日は壁の破壊とそのラッパを取りに行こう』

『おっけ～』

『分かつたわ』

『ん・・・』

ん、女三人よれば姦しいとはいつかど、朝からなんとも騒々しな・・・。

ま、こんな生活も悪くないか・・・。

「さて、と・・・」

バクダン岩はレーダーには映らない。セントの勘だけが頼りだ。

「こつちね」

「こつちつて・・・水場、なんだが?」

「そうなのよね~。どうしよう?」

「いや、どうしよう? つて聞かれても・・・」

「ねえねえ、あそこから降りればいいんじゃない?」

ユーシイが指した方向を見る。

水場を渡りきった先に、横の坂道から降りれるようだ。

「そうだな、まっすぐ水場から行こうとするより安全だ」

俺にはバクダン岩の扱い方は分からぬ。スズもダメだつて言つてたし、どうしてもセントがいないとな。

「よつと」

段差を降りて、先に進む。

「また段差か・・・しかも結構高いな」

「戻つてこれるかしら・・・」

「水場を歩いていけば戻れるみたいだな」

ユーシイとスズをその場で待たせて、セントと一緒に段差を降りる。

「あの中ね」

洞穴の中に入つていいく。すぐに戻つてきた。

「すごいわ。こんなにあるなんて」

「うわっ、ちょっと多すぎないか?」

両手いっぱいのバクダン岩。ずいぶんいっぱいあるな。

「うーん、こんなに持つてたらあそこまで届かないわ

「じゃあ俺が投げるよ。それなら届くだろ」「え、ええ。でも、オリマーはどうやって戻るの？」

「俺は水場を超えていくさ」

俺は防御服のおかげで火でも水でも大丈夫だしな。「じゃ、いくぞ」

「ええ」

「そ～れっ」

「よつと」

上手く打ちあがつた。ふわりと着地を決める。

「よし・・・と、もう一つ段差があつたな。急いで戻らないと水場を振り返る。と、レーダーに反応があつた。

「ん? なんだ・・・水の中にあるのか・・・?」

近づいて確かめる。

「こりゃイオニウムジェットだな・・・」

宇宙船の加速力となるパートだ。宇宙へ出るのに必ず必要となる。ちょっととラッパに似てないこともない。

「はは～ん、スズが言つてたのはこれか・・・」

あとで一緒に来てみよう。

「オリマーツ！早く～っ！」

「ああ、すぐ行く！」

「よつ」

「んしょつと」

3人を段差に投げ上げて、間欠泉に乗る。  
「ひやつほーう」

吹き上がる水に乗つて、段差の上に上る。

石で塞がつていたものを、手持ち無沙汰だつたスズが開けたらしい。

「よし。さて、どこから手を付けたものか・・・」

セントの話によると、宇宙船の着陸地点の近くに一つとその奥に二つ、ちょっと歩いたところに一つあるらしい。

「じゃあ宇宙船の近くから開けていい。パツを運ぶ時に多少なりとも近道のほうがいいだろ？」「宇宙船の近くまで戻る。

## 宇宙船の近くまで戻る。

黒い岩で出来た壁がそびえ立っていた。

「これは硬そうだね……」

ヨーシイが、試しに殴つてみた。

「セレジ、このバクダン君が活躍するのよ。まあ見てて」

セントは岩壁の向こうに3個ほど投げ込む。

ドオオ・・・ン

ガラガラガラ・・・

土煙が晴れると、半分ほど壊れた壁があつた。

「うつわ〜・・・すつごい破壊力だね〜・・・」

「危ない・・・」

うん、ちよつと足りなかつたかな。もう3つくらい・・・えい

15

ドオオ  
・  
・  
・  
ン

ガラガラガラ・・

今度は完全に崩れたようだ。

「よしよし。オリマー、3個あまつたけど、どうある?」

右壁を見つけたセンターは、その場にしゃがみこんでなにやらブツブツ

ツ言い始めた。

「田標までの距離、大体5mつてとこかしら。だとすると、これくらいで・・・よし」

立ち上がり、バクダン岩を構える。

「お、おい、セント? まさかここから投げ・・・」

「そりやつ、そりやつ、そりやつ!」

怒涛の三連投。それらはまったく同じ軌道を描いて、岩壁に激突、爆発した。

ドオンドオンドオオ・・・ン

ガラガラガラ・・・

・・・半分以上崩れたようだ。明日には完全に崩せるだろ?。

「いや、すごい遠投だな。さすが」

「まあね~。これで一つずることは終わったわね」

「次はなんだつけ?」

「スズの言つてたラッパは、多分やつたのといふことある。行こう!」

「ん・・・」

「スズ、これが?」

「うん・・・」

どうやら当たりだつたらしい。

ゴーシイとセントを水辺に待たせて、一人でパーティのところまできた。

「これは軽いほうだから、持てるかな」

「ん・・・大丈夫・・・」

ひょい、と持ち上げる。

「おつけー。じゃあ宇宙船まで運んでくれ

「ん・・・」

・・・そういえば水に浸かって大丈夫だらうか。使えるかどうか微妙なところだ・・・。

「ね、ねえオリマー。これ大丈夫なの・・・?」

「・・・ダメかな、やつぱり」

宇宙船に取り付けたものの、プスプスと黒煙を立ち上らせるイオニウムジエット。

「はあ～・・・仕方ない、解体して乾かそう・・・」

「解体つて、壊しちやうの?」

「いや、一度バラバラにするんだよ。このまま干しても中が乾かないし、そうすると錆びるから」

「ふむふむ、なるほど～」

「やつぱり分かってないだろ、お前」

「そ、そんなことないですよ～?ねえセント?」

「え?あ、え、ええ、そうね・・・あ、あはは」

「二人とも、目が泳いでんぞ」

「「う・・・」

「オリマー・・・」

「ん?どうした、ズズ」

「・・・くさい」

イオニウムジエットを指さし、鼻をつまんでいる。

「うわっ、ほんとだ」

「やだあ～、何の臭い?」

「そりなんだよねえ、この臭いさえなんとかなれば問題ないんだけど・・・」

とりあえず、電源を落としておひや。

「温泉とかで良く嗅ぐ臭いなんだよなあ。何だつけ、あれたしかこのイオニウムジエットの名前の由来になつた成分なんだが・・・忘れしたな。

「オンセン?」

「ああ、温泉は知らないか、さすがに「何のそれ？」

「んー、温かい泉、みたいなもんかな。皆で浸かって温まるわけよ」

「ふうん、温かい泉かー。それならあるかもしれないね」

「そうなのか？」

「さつき間欠泉があつたじゃない? きっとあれ辿つていつたらあるんじやないかなあ」

と、いうわけで。

スズに水脈を辿つてもらつてたどり着いたのは

「うわあ、すごー」・・・

「ひろーい!」

俺の家が丸々入るほど広さの温泉があつた。

「よーし、早速温泉に・・・つて

宇宙服を脱ぎかけて、気づく。

「・・・これ脱いだら、俺、息できなくなるよな・・・?」

いや、でも外には酸素の反応出てたし、念のために着てたけど、着

てなくとも大丈夫、なはずだし・・・。

「おーい、何やつてんのオリマー?」

「あ?」

見ると、温泉には既に3人の姿。

「おお・・・」

そこには、湯煙に包まれて、肢体を晒すコーラルたちがいた。・・・  
服のまま。

「・・・つて、服脱がないの?」

「え? 脱ぐの?」

「あー、そつか。知らないんだつけ・・・」

「もしかして、脱いだ方が・・・良かつた?」

・・・なんで顔を朱に染める。

「・・・あー・・・ま、いいんじやないか」

「 セウ？」

「のままでもお湯の温かさは伝わつてへる。」

「 ふう～・・・いい気分だなあ～」

「 そうだねえ～・・・」

「 たまにはこいつのものいいわね～・・・」

「 ん～・・・」

「 平和だ・・・何とも平和だ・・・。」

「 宇宙船が直つて、ホコタテ星に帰れたら、今度は慰安旅行としてここに来たいね」

「 そしたら、今度はあたしたちが案内するよ」

「 ん・・・オンセン、ここだけじゃない」

「 大自然の驚異、つてヤツかしらね～・・・」

「 うまいこと言つね」

「 えへへ」

俺たちは、今日一日の疲れを、この温泉で癒した。  
しばりくすると、く～、という何とも可愛らしい腹の虫の声がする。

「 とは言つても腹はやつぱり減るわけで・・・」

「 う～・・・」

「 わかつたわかつた。そんな田で見るな。ちやんと取つてきてやる  
よ」

「 わーい」

コースイたちを飛行船の前で待たせ、近くを散策する。

探しているのは、もちろんペレットの花である。

「 お、あつたあつた」

三色のペレットが咲き誇る花。

「 三つ一遍に見つかるなんてラッキー」

それら三つを叩き落し、飛行船へと戻る。

「 ほれ、コースイ」

赤いペレットをバス。

「 さんきゅー、オリマー」

ゴーシイはペレットをオーロンへと運び込む。

「セントと、スズにも」

「ありがとう、オリマー」

「・・・ありがと」

セントとスズも、それぞれペレットをオーロンへ運び込む。

「さて、と。俺は・・・」

周りを見渡す。

「そろそろ食糧にも気を配つて貰は無理か。自足だけはない」と・・・

この星には巨大な木や草が多くある。

もしかしたらそれ相応の木の実や何かもあるかもしれない。

「ん・・・・・」

「オリマー? 何きよろきよろしてんの?」

「いや、木の実か何かないかな~、つてわ」

「ああ、それなら・・・ほら、あそこ」

「ん? どれどれ・・・」

ゴーシイが指した方向の木の上のまづ、赤く熟した木の実が下がつている。

「おお、うまそー!」

「でもあれだけ高いと届かないかなあ・・・」

「何々? どうかした?」

セントとスズも食事を終えて戻つてくる。

「あ、セント。ねえ、あの実なんだけど、取れる?」

「あれね。待つてて」

よつ、と軽く跳躍して木の枝に飛び乗る。

「それっ」

更に木の枝を飛び渡り、木の実が成つている枝に到達する。

「すごいな~・・・まるで軽業師だな」

「かるわざし?」

「んー、有体にこつと、ピロロつてと」

「なるほど……あ、オリマー、危ない！」  
「え？ どわつ！？」

上から降つてきた木の実に押しつぶされた。

「「めーん、落としちやつたーー大丈夫ー？」  
「いつつ……あ、ああ、何とか……」  
それにしても……デかい。

「こんだけありや三日は持つぞ……」  
とりあえず一口。

「あむ」

しゃりつとした果実の歯応え。ジューシーな果汁が口の中いっぱいに広がる。

「うん、美味しい」

味はホコタテ星の果物、リンゴと同じ感じ。  
水分が豊富でビタミンもタップリだ。

「どれどれ……あーむつ」

コーチイも、カリッと皮を噛んで剥き、果肉が見えたところから果汁をちゅーちゅーと吸い上げる。

「ん……あまーい！」

「つて実」と行けよつ！

と、思わず突っ込んでしまつたが。

確かに甘い。いや、甘酸っぱいと言つのか。  
とにかく美味しい。今のところ干し肉しか味わつていなかつた舌は、  
この新鮮な味をしつかりと記憶した。

「なあ、この実つて何処にでもあるのか？」

「そうねえ……この実とは違つけど、同じようなのは結構あるわ」

「へえ……美味しいし大きいし言つことなしだな」

これなら食糧の心配はいらなさそうだ。少しホッとした。

「何々？オリマー、木の実食べるの？」

「ああ。コーチイたちでいうペレットみたいなもんだな」

「なるほど……あ、じゃあじゃあ、見つけたら取つてきて上げ

るよ」

「お、ホントか？助かるな～」

「えへへ、いつもペレットを取つてきてくれるお礼～」

「そりが？悪いな」

「いえいえ」

「私たちもお世話になつてゐるし、協力しましょ？」

「ん」

それから俺たちは、この巨大な果実を4人で長々と平らげた。

「いや～、食つた食つた」

「美味しかつたね～」

「大地のエキスを豊富に含んでたみたいね。あと数日もすればそこら辺の木からも採れるようになるかしら」

見ると、周りの木のあちこちに、まだ青い木の実が下がっていた。どれも大きく、中身が詰まつていることを誇張している。

「うん・・・よし、これなら食事には困りそつに無いな」

「そうだね」

「ん～・・・」

「ん？どうしたスズ？」

グッタリと横たわるスズ。ほんのりと顔も上氣している。

「あ・・・」

「あ？」

「・・・熱い」

ぱたぱたと手で顔を仰ぐ仕草。

「熱か？どれどれ・・・結構高いな・・・」

スズのおでこに手を当て、熱があるのかどうか確かめる。

「あ・・・ん」

「ん？どうした？ のわつ！？」

「ん～・・・」

押し倒された。いや、厳密に言えば寄りかかってきた、だろ？か。とにかく、下敷きにされた。

「お、おい、大丈夫か？」

「ん・・・ムリ」

「ムリって・・・ん？」の二オイは・・・

「これは・・・酒？」

まさか・・・

「スズ・・・醉つてる？」

「・・・ん」

やつぱり。

あの果実、低度のアルコールを含んでいたらしい。

確かに、身体は火照つてゐるけど。温泉に入つたからかと思つてた・・・

「おーい、誰かー。助けてくれー」

「何やつてんのオリマー・・・よいしょ

「ん・・・」

「あれ・・・? 力が・・・よつ・・・あれれ?」

ユーシイがスズを持ち上げようとするが、アルコールで力が入らないらしく、持ち上がらない。

「あれ~・・・?」

どうやら運動したのがまづかったのか、酒の巡りが早くなつて全身に回つたようだ。

「世界が回るう~・・・」

「お、おいユーシイ」

「あは、あははは」

「いや笑つてる場合じゃないだろ」

「え~、でも~。何かおかし~。あははは」

お腹を抱えてゴロゴロと笑い転げる。

・・・ツボにでも入つたのだろうか。

「・・・何が?」

いや、今はそんなことはどうでもいい。

とにかく、この状況をどうにかしないと。もつすぐ日も暮れるし。

「あれ？ そつこえはセントがいないな・・・」  
確かアイツもさつきの食べてたから・・・

「まさか・・・」

「ん~」

「あー、スズ、ちょっと遅いでくれるとありがたいんだが」

「やだ」

「やだつて・・・」

「や~だ~」

「あーもう、ゴーシィはまだ笑つてゐし！」

「あは、あははははは、お、お腹痛い~ひやつひや」

つかこつち指差して笑うなー！

「この野郎・・・え~い、もつと笑い転げてしまえ！」

「ひやわつ~1?」

「口口口やつてたゴーシィの足をがつちりホールド。そして

「口チヨ 口チヨ 口チヨ」

「あははははははー~や、やめ、あはははは

「おらおらーー！スズ、お前もやつちやえ」

「ん~」

「いやあ~はははははー~や~め~てえ~！」

よく見ると、スズは抱きついてるだけだつたりするのだが、どうも全身が敏感になつてゐるらしい。

「よ・・・いしょ、と。スズ~。ちょっとゴーシィの相手しててくれ~」

「ん~」

「え、ちょ、ちょっと待つ、ひやわ~!~す、スズ、そ、そこだめ、

あははははー~」

「せいぜい笑い転げるといいぜ~。酔いも醒めるかもな~。はつはつは

「はつはつはじやない~！スズ~、お願ひだから離れて~！」

「や~だ~」

卷之三

セントの姿がさつきから見えなかつたが……状況的に考えてあいつも酔つてゐるんだろうな……。

「お、いたいた・・・お、い

「え・・・？」

ほんのりの上気した頬。トロンとした眼。荒い息。

お おい 大丈夫か？熱でモリモリあーーー！

宇宙服越しにでも感じ取れるほどの熱さ  
で、脳髄は手を当てるも  
つと焦げたかも……。

熱い　・　・　・　熱いのお　・　・　・　」

「あー、え・・・けど、とにかく、そのままじゃ危険だな・・・」

セノリを抱きかかれて、おまえさんへと連れて行く  
「あ、つ、ミ、永、ゲ、久、リ、ハ、ジ、ツ、ニ、シ、  
ミ、ア、幾、リ、」

そつと水面へ下ろす。

「あ・・・冷たい・・・気持ちいい・・・」

せんべの周囲の氷が見る見るしお湯へと変わり、せんべん蒸発していく。

これはガカリ危険なんじゃ

「…たセント? 落ち着いたか?」

「おっと、忘れてた。ちょっと様子見てくるから、大人しくしてる

んたせ?

卷之三

「あー、どうだ調子……は……」  
ひとまゝゼントをその場は残し 二「シ、たちの元へと戻る

ヤバい・・・ユーシイから真っ赤なオーラが・・・。  
「よ～じやなあああああ～い！～！」

「うひやつー？」

「危うく笑い死ぬところだつたんだからあーつー！」

「いや、悪い悪い。それよりスズはどうした？」

「もう……。スズなら寝ちゃつたよ」

「そつか。起こすのもかわいそつだし、オーランに連れてつてやるか」

「うん……あ、そつこえはセントは？」

「あ、そつか、そつちもあるんだ。うーん……」

スズを置いていく訳にも……。

「じゃあスズは私がおぶつていくから。セントのところに」と

「ああ。悪いな」

スズをコーリーにおぶつてもらひ、急ぎセントの元へ。

「おーい、セントー！」

「あ、オリマー……」

「どうだ、熱は引いてきたか？」

「うん、多少は……」

「そつか。今日はもう遅い。ひとまずオーランに戻つて休むとしよう。よつと」

「あ……」

セントを抱きかかえ、コーリーと共に宇宙船へ。

「じゃ、スズ寝かしてくるね」

「ああ」

コーリーはスズをおぶつたまま、スズのオーランへと入つていく。

「セント、大丈夫か？」

「ん……」

水から揚げたことで、また熱がぶり返したみたいだ。

「今日はゆつくり休むんだぞ？」

「うん……」

俺はオーランの中に入ることはできない。

入り口まで行くとするとオーランが拒否反応を示すためだ。

仕方なく、ペレットと同様に吸い上げても「うつ」とした。ひょりと強引だけど。

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい・・・」

オニオンに吸い上げられて入ってしていくセント。

途中で欠伸を漏らしてたから、多分大丈夫だろう。

「オリマツ」

「お、ユーシイ。」「苦労さん」

「ん。それじゃあ、私も戻るね。おやすみ、オリマー」

「ああ、おやすみ」

ユーシイと手を振つて別れ、お互ひの寝床へと戻つていく。

今日は色々あつたなあ・・・。

遭難五日目。今日は周囲の壁を大量に見つけたバクダン岩で処理したことと、イオニウムジョンの回収が主な出来事だ。

また、この星の木に成っている木の実は自分も食べることができた。この星での食糧調達はできだが、ユーシイたちには食べさせないほうがいいだろうな・・・。

明日まで引っ張らないといいけど・・・と、彼女たちに頼りすぎるのもちょっととな・・・。

今日はぐっすり寝られそうだ・・・。

## 第五章 星と大地と新たな発見（後書き）

極低度、極微量ではあります、彼女たちには強すぎたようですね。  
服を着たまま入るのは御法度ですよー。よい子はマネしてはいけま  
せんよー。w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4536a/>

---

キャプテン・オリマー冒険記

2010年10月9日15時36分発行